

『生きているむかし』誌創刊に見る ロシア口承文芸学の動向

斎 藤 君 子

一九九四年はロシアの口承文芸学にとって時代を画する年となつた。フォークロア専門誌『生きているむかし』（季刊誌）が創刊されたのである。手元に届いた創刊号から九五年二号までの六冊を見ながら、ロシアの学会の近年の動向を追つてみよう。

『生きているむかし』という名称は革命前にロシア地理学協会が刊行していた雑誌の名を継承したものである。旧誌は一八九〇年に創刊され、ロシア革命によつて廃刊に追い込まれるまでの二七年間、方向性の異なるさまざまな研究者たちに発表の場を与え、ロシア口承文芸学の形成、発展に寄与してきた。その伝統がソ連邦の崩壊とともにここに蘇つたわけである。ソビエト時代七〇年間を通して、ロシアの口承文芸学会は独自の定期刊行物をもたなかつた。もちろん、発表の場がまったく保障されていなかつたわけではない。レニングラードのブーシキン文館から不定期刊行物として出されている『ロシアフォークロア』があるし、雑誌『ソビエト民族学』にも口承文芸学関係の論文が多数掲載されてきた。しかし、それだけでは現在の学会の多面化した要求を満たすことはできなかつた。

ソ連邦崩壊後の激動する情勢の中で、これほど短期間に専門誌の創刊を実現したのは、ソビエト時代のさまざまな拘束から解放さ

れた研究者たちが、新しい時代を切り開くために情熱を注いだ結果であるに違いない。「全体主義を放棄したロシアにとって現在残されている切実な問題は獲得した自由をいかに行使すべきか、社会の幸福のためにその可能性をいかに利用すべきか」ということである」。B・N・プチロフは創刊号の巻頭論文「自由の門に立つロシア口承文芸学」をこのようない衝撃的な言葉で書き出している。この論文の日付は一九九一年になつてゐるから、ソ連邦が崩壊したまさにその年の内に、すでにこの雑誌の刊行が決まつていたことになる。

新しく刊行されたこの雑誌は旧誌の伝統を受け継ぐと同時に、現代に生きているロシアの口承文芸を研究し、精神文化を学ぶなかから、新しい時代にふさわしい文化を生み出すことを目指している。監修者のN・I・トルストイは、この雑誌は「純粹な学術誌ではなく、民衆の言葉をたいせつに思つてゐる幅広い読者を対象としたボピュラーサイエンス誌になるだろう」と述べてゐる。この方向性は、ソビエト時代にこの学問が民衆の現実の生活から切り離され、その時代の生きている精神文化を背景としたフォークロアを研究対象とすることを許されなかつたという苦い経験を踏まえた結果、出

されたものである。

ソビエト時代には、社会主義国にあってはならない飢餓や、集団

化政策を強制された民衆の苦しみ、収容所の生活など、鉄のカーテンの外に知られたくない事実をほのめかすような言葉はいつさいタブーとされてきた。そういう類の話は記録しただけでも、研究者の身に危険が及ぶ可能性があつたし、民衆自身も堅く口を閉ざしていたので、これまで活字になることはなかつた。全体主義による学問への介入はそれだけに留まらず、為政者にとって都合のいい「現代民話」を捏造し、社会主義体制と党の指導者を讃美する神話をでつちあげることさえやつてのけた。

創刊号に目を通すと、ソビエト時代における学問の抑圧がわたしたちの想像をはるかに越えるものであったことがよくわかる。K・V・チストフによれば、イデオロギーによるいかなる干渉もなく、マルクス主義の古典に対してもんらぎを使うことなく書かれたロシア文芸学界最後の著作は、ウラジーミル・プロップの『昔話の形態学』（一九二八年）とアンドレーエフの『昔話タイプインデックス』（一九二九年）であった。その後、ロシアの研究者たちは外国との交流を断たれ、鉄のカーテンに閉ざされた中で、検閲の目を恐れながら研究を続けるほかなかつた。第二次大戦以後、スターリンの排外主義、反ユダヤ主義を背景に「コスマボリタニズムとの闘争」が繰り広げられた。知識人に対する迫害の波がとくに激しかつたのはレニングラードだった。こうした悲劇的な情勢の中で起きたひとつの大事件を伝えるのは、創刊号に寄せられた「ジルムン

スキーの研究生活上の一つの忘れられたエピソード」と題するチストフの一文である。

一九四七年に開かれた作家同盟総会において、ファジエーエフは「ヴェセロフスキ学派」批判を行い、ロシアの比較文芸学、比較口承文芸学の基礎を築いたアレクサンドル・ヴェセロフスキを西欧にひざまずく者として批判した。ファジエーエフの演説はアレクサンドル・ヴェセロフスキを彼の兄弟のアレクセイ・ヴェセロフスキと混同するという無知を露呈したものだったが、その後もレンゲラードではジルムンスキーやアザドフスキなどの名を挙げた、学術的内容のない、激しい批判が繰り広げられた。そのころ、民族叙事詩「カレワラ」がフィンランドのレンゴートによって出版され百年になるのを記念する催しがカレリアで開かれることに決まった。これは戦後、国連の後援を受けて行われる記念行事の一つとなるものだった。ペトロザヴォーツクで開かれた準備会議の場でメレチンスキイの提案により、ジルムンスキート・プロップを会議に招待することに決まった。ところがプロップはこの少し前に彼の著書『魔法昔話の起源』（一九四六年）のために激しい攻撃にさらされたばかりだったし、ジルムンスキイはコスマボリタニズム主義者のレッテルを貼られ、中央の出版物から閉め出されていた時期である。そんなときにもかかわらず、「カレワラ」出版百年記念行事の実行委員会議長クーシネンは二人の学者の参加を拒む理由はどこにもないとして、これを承認したのである。なぜだろうか。クーシネンは有名なコミニンテルン活動家で、当時カレリア・フィン共和国最

高会議議長を勤めていた人物である。その彼が二人の参加を承認した背景には実は次のような政治的事情があつた。

当時のソ連は鉄のカーテンによって西側諸国から隔離されており、とくにフィンランドとは領土問題をめぐって険悪な関係にあつたので、参加者を迎えることは望むべくもなかつた。そんななかでこの記念行事を政治的、学術的に意味あるものにするには、国内の権威ある学者を参加させる以外になかつたのである。クーシネンがそのためいかに心を碎いたかは次の一事をもつてもわかる。ジルムンスカヤ夫人の回想によると、クーシネンはジルムンスキーリの研究発表を公式に許可する手紙を通常の郵便ではなく、党の文書を使つて届けさせたというのである。

こうしてジルムンスキーリとプロップは一九四九年二月、議会に出

席するためにペトロザヴォーセツクにやつてきた。ところが研究者の発表論文に事前に目を通したクーシネンは、「フォークロア的觀点から見たカレワラ」と題するプロップの発表を退けた。プロップの主旨は、レンロートの「カレワラ」は記録された民間の英雄叙事詩ではないこと、民間伝承としての英雄叙事詩が成立したのはカレル人やフィン人がまだ民族として形成されていない時代のことであり、したがつて「カレワラ」の帰属をめぐる綱の引き合いは意味がないとするものだつた。プロップのこの主張は記念行事全体の発想と合ひ入れなかつたため、発表を許可されなかつたのである。クーシネンは学術セクションの開会にあたり、カレワラはフィンランドではなく、カレリアの優れた民族叙事詩であると述べ、政治的意図

をたぶんに含んだ報告を行つた。

一方、ジルムンスキーリの論文には「ブルジョア学派」、「ブルジョア民族主義」といった言葉があちこちに散りばめられており、「ブルジョアコスマボリタニズム」といった言葉まで使われていた。だがチストフによれば、そのことだけを取り上げて、ジルムンスキーリが権力に迎合したとして批判することはできないという。なぜなら、当時は論文にこうした言葉を散りばめることは、困難な情勢の中で自分の研究を守るために苦肉の策として、ふつうに行われていたことだつたからである。ともかく、ジルムンスキーリの発表は実現し、大会後すぐに印刷され、公表された。これが契機となつて、この年にジルムンスキーリは二つの小論文を新聞に掲載することができた。

この例に見るよう、ソビエトの研究者たちは不自由な中で自分たちの学問を守り、発展させてきた。論文を発表するためにはところどころに適宜マルクス主義の古典を引用して当局の目をごまかし、幾重もの検閲をくぐり抜けなければならなかつた。そんな不自由な状況にもかかわらず、優れた研究成果をあげることができた分野がある。それはフォーカロア資料の収集と出版、ジャンル分類に関する基礎的研究、少数民族のフォーカロア、とくに英雄叙事詩の収集と出版に対するロシア人研究者の積極的な取り組みなどである。六〇年代後半になると構造主義、記号論、歴史的類型学的研究など、新たな潮流の急速な発達により、唯物論を唯一のものとする思想と決別する必要性が広く認識されるにいたつた。そして、口承

文芸とは社会の営み、歴史的現実と呼応しながら、独自の法則に基づいて発生し、成長するものであることが改めて確認された。ソビエト時代にロシア口承文芸学がたどった歴史を踏まえ、今後の課題として次の二点を主張している。第一点は研究対象を從来の「言葉の芸術」という狭い概念に閉じ込めず、より広い意味の「口頭伝承（オーラルトラディション）」とし、詩的形式に限定せず、音声とアクションを媒介として伝承されるもののすべてを取り扱うこと。第二点は第一点と密接に関連しているが、「民衆」という言葉の概念規定に関する問題である。ソビエトでは從来、「マルクス主義的解釈の加わった「ナロード」という概念を「フォークアーティスト」という単語に当てはめてきた結果、フォークロアが特定の社会的色彩を帯びたものになっていた。本来、フォークとはロシア民族の口頭伝承を共有する集団であり、社会的、職業的、地域的、年齢的基盤の上に形成されるものである。このような認識に基づき、新しい雑誌はこれら集団内に伝わる種々さまざまな文芸を取り上げている。民衆は労働者と農民だけではない。商人もいれば、役人もいれば、学者もいる。学校や修道院や牢獄で語られるいふ話も民話である。あらゆる層の民衆によって語り継がれてきた言葉を研究対象としなければならない。

こうした姿勢の一つの現れとして、雑誌『生きているむかし』では「都市のフォークロア」に多くのページが割かれている。一例を挙げると、囚人たちが夜の監房で監視の目を盗み、新入りを相手に行う罪のないいたずらまで研究対象として取り上げられている。市

場の物売りや呼び込みの口上（九四年一号）、大道芸（九五年一号）を扱ったA・F・ネクルィローヴアの論文は帝制ロシア時代の都市の活気を彷彿させる。こうした伝承の研究はまだ人々の記憶に残っている現在でなければならない貴重な仕事である。

九五年の第一号では「今日的テーマ」と題する特集が組まれ、「現代の伝説。ペテルブルグ」、「歴史資料としてのソビエト時代の囚人の歌」、「若年犯罪者監房からのノート」、「現代都市文化のテキストに見るモニュメント」、「モスクワ医学校における呪術と迷信」といったタイトルの論文が並んでいる。これらのジャンルはいずれもこれまで学問の対象としえなかつたものばかりであり、現代に生きるロシアの民衆のありのままの生活と苦悩を伝えている。

「現代の民話」、「都市の伝承」といったテーマは我が国でも近年、研究者の注目を集めしており、すでに数多くの資料が蓄積されているが、ロシアではソビエトの崩壊によって開かれたばかりの、いわば新開地である。口承文芸のフィールドワークというのはこれまで、どこか遠くの町や村へ出かけて、いって聞くものだという固定観念が根強かった。また、大都会にお百度詠りをする老女がいたり、首都の医学校の生徒が病氣のときに呪文を唱えたりといった類のことは前世紀の遺物であつて、社会主義大国ソビエトにあつてはならないことであるかのような見方が学会でも支配的だつた。

まして、国の指導者を揶揄するような話を研究するなど、もつてのほかだつた。だが民衆は権力者の思惑をよそに、町のあちこちに

そびえ立つ彼らの銅像を指さし、変動する時代に合わせて話を作り変え、楽しんできた。たとえば、背広を手に駅前に立っているレーニンの銅像を指して、「あれは駅前で背広を売る老人だ！」と言つて笑うといった具合である。これは、国家の経済政策の破綻によつて生活に困った年金生活者が売り食いをしている現実と、レーニンの権威の失墜とによつて生まれた、まさに現代のフォークロアである。KGB（国家保安委員会）の建物がフィンランド駅と地下通路で結ばれているといった噂話もかつては治安を脅かす流言蜚語として学問の対象から除外されていたが、ソ連邦の崩壊によつて口承文芸として認知された。このように、政治的理由から学問の対象にしえなかつたさまざまなジャンルの話が取り上げられていて、誌面に活気を与えている。

読者を研究者に限定せず、民間伝承を愛するすべての人を対象にしていることは、子供のためのページが設けられていることからもわかる。創刊号には子供たちに向けて投稿を呼びかける、次のようなアピールが掲載されている。

コンクール

『生きているむかし』誌では児童フォーカロアの優れた記録を競うコンクールを開催します。コンクールには大人でも子供でも参加できます。数え歌、怪談、小噺、遊戯など、みなさんがおもしろいと思ったことを記録して、送ってください。とくに高く評価されるのは、わたしたちの今日の現実、今日の諸問題がなんらかの形で反

映されているものです。だから記録したかを忘れずに、手紙に書いてください。優秀な資料は雑誌に掲載します！

九四年第四号は「民間信仰」の見出しのもとに、民間呪術師と魔法使いに関する論文が二本収められている。この分野もロシアの学会では長い間タブーとされてきた。社会主義時代においては、どんな僻地の住民といえども現代医学の恩恵に与る権利を保障されていというのが建て前だった。呪術で病氣を治すなどという誤った思想は古い迷信であつて、すでに遠い過去に葬り去られたものであり、現代ソビエト社会には存在しないはずのものだった。ところが、現実の村々にはズナーハルカと呼ばれる呪術師のおばあさんたちが健在で、今も子供の疳の虫封じやヘルニアの治療などにあたっている。

この夏、筆者は渡辺節子さん、中川裕さん、熊野谷葉子さんの四人でフォーカロア調査のために北ロシアの北ドヴィナ川流域の村々を訪ね、三人のズナーハルカから直接話を聞くことができた。三人ともたいへん控えめな女性だったが、ズナーハルカであることをみずから率直に認め、わたしたちの調査に積極的に協力してくれた。このようなことは数年前にはまったく考えられなかつたことで、彼女たちを取り巻く状況が劇的に変化したことを感じさせられた。ペテルブルグからわたしたちに同行したロシア人研究者もあとで、「これまでの経験では、ズナーハルカから話を聞きだそうとしても、彼女たちは口を開いてくれなかつた。それが今回は！」と驚きの声

をあげていた。

ズナーハルカは治療を職業にしているわけではない。ふだんはふつうの人と変わりなく、畑を耕したり、牛を飼ったりして暮らしている。心づけに多少の金銭や小さなプレゼントをもらう程度である。彼女たちは自分がオールマイティではないことを知っていて、自分の手に負えない病気の場合は患者に病院に行くよう勧めているという。彼女たちを訪ねてくる患者の多くは、なにかに驚いてしゃっくりが止まらなくなったり、夜泣きをする子供など、主に情緒不安定に陥っている人々である。ズナーハルカが泉から汲んできて患者の体に吹きかける水は最高の精神安定剤である。彼女たちはいわば村人たちにとってカウンセラー的存在であり、呪文をとなえることによって人々の心と体の痛みを取り除いてきたと言える。

北ロシアで出会った三人のズナーハルカはみな村人から信頼され、頼りにされてきた。僻地へ行けば行くほど、ズナーハルカたちの果たしてきた役割は大きい。「ズナーハルカと医者とどちらが頼りになりますか」という筆者の問いに対し、即座に「ズナーハルカ！」と答えたおばあさんの声が今も耳に残っている。また、長い呪文を記憶しているズナーハルカは例外なく優れた記憶力の持ち主なので、他のジャンルのフォークロアについても優秀な語り手である場合が多い。ロシアの研究者がズナーハルカに注目しはじめたのは当然であり、たいへん喜ばしいことである。

今回の調査でもう一つ大きな驚きだったことは、年寄りはもちろん、会う人ほとんど全員が自分自身や身近な人の身に起きたふしが

なできごとについて語ってくれたことである。椅子がひとりで歩き回るとか、離れて暮らしていた夫が死んだとき、家の窓ガラスをコツコツたいて知らせたといった話（ブィリーチカ）が次々に出てくるのだ。ほとんどの人が自分の家にドモヴォイ（家の精）が住んでいるのを肌で感じている。アファナーシエフスカヤ村の博物館長を勤めるワーリャという四〇代半ばの女性などは、自分の家のドモヴォイおじいさんに名前すら付けていて、いつも彼と話をしているのだという。このドモヴォイは以前はバーニャ（ロシア式の蒸し風呂で、家とは別棟）に住んでいたが、バーニャは週に一度しか焚かないからふだんは寒いので、彼女はドモヴォイおじいさんに話して家の納屋に移ってもらつたのだそうだ。

北ロシアはまさに「遠野物語」の世界だった。このジャンルも最近やっと解禁になり、長い間眠っていた資料が世に出はじめた。ロシアにおいても口承文芸が消滅の危機にあると言われはじめてすでに久しい。すでに一九世紀初頭に口承文芸は消滅しつつあると断じたジャーナリストさえいる。ところがその後、精力的に調査が進められ、豊富な資料が蓄積された。現在ではジャンルによつて伝承状態にはつきりしたコントラストがあることがわかっている。英雄叙事詩や古い歴史歌謡、宗教詩、魔法昔話といったジャンルに関して言えば、伝承の火がもはや風前の灯であることは、フィールドワークをおこなつてゐる研究者たちの一致した見方である。とはいえ、炉端で魔法昔話を語る伝統が完全に絶えてしまつたわけではない。

北ロシア、ヴォルガ河中流域、シベリアの一部では古い伝統が今も

残っている。他方、世間話や小噺、叙情歌、都市のロマンス、チャ
ストワーシカ（その時々の世風を盛り込んだ四行詩）のように、新
しい作品がどんどん生まれているジャンルもある。アフガニスタン
で戦争に加わった若者たちが語る話のように、これから聞き書きを
はじめなければならないジャンルもある。

いずれにせよ、ロシアの口承文芸学が今まさに大きな歴史的転換
期にあることは間違いない、今後の発展が期待される。

（さいとう・きみこ）